

沖縄における学校づくり

狩野 浩 二〔鹿児島大学教育学部（教育学）〕

Improvement and Enhancement of School Administration in Okinawa Prefecture

KARINO Kouji

キーワード：斎藤喜博、教授学、沖縄第三土曜の会、学校づくり、学校公開研究会

【目次】

1. 離島・へき地における教育課題と研究の方法
 - 1) 機関研修の限界
 - 2) 離島・へき地における既成概念
2. 沖縄における学校づくりの展開
 - 1) 教育実践の創造と教師たちの学習
 - 2) 学校づくりにおける校長の役割
 - 3) 外部講師が参加することの意味
3. 学校における研修を深める意味
 - 1) 実践家と研究者の関係
 - 2) 研究者としての関わり方
 - 3) 実践家としての関わり方
4. 伊江村立西幼稚園、西小学校による学校公開研究会
 - 1) 表現活動（オペレッタ）の事前における手入れ
 - 2) 子どもの事実に対応する指導の在り方
 - 3) 学校公開研究会における直前の指導
 - 4) 授業づくり—授業案づくりと授業の検討
 - 5) 学校公開の意味と地域への波及効果

【概要】

本年（2006年）春に行なわれた沖縄県国頭郡伊江村立西幼稚園、西小学校における学校公開研究会は、これまで9年間にわたって続けられてきた同校の教育実践を総括する会である。この間3名の校長が交替したものの、一貫して授業と行事の充実を学校経営の主力として追究してきた成果が公開研究会によって示された。筆者は、西幼稚園・西小学校における学校づくりの実際について、同校の教職員をはじめ保護者から話を聞き、また同校で行なわれてきた校内特別研修会に参加

（2005～2006年）しながら、その実情を見てきた。西幼稚園・西小学校における学校づくりの特色は〈教授学研究会〉に参加する教師や研究者から学びつつ、学校内における教師の研修活動を充実させ、教師と子どもとの接点を充実させる努力を継続してきたというところにある。そのことは離島やへき地における学校づくりのひとつの典型を創造したといえるのであり、子どもたちが授業や行事の中で生き生きと自己を表わすことによって、島全体がよい方向に変わってきているという事実がその証左であるといえる。

1. 離島・へき地における教育課題と研究の方法

1) 機関研修の限界

離島・へき地において、学校教育を充実させるという課題は、いつの時代においても重要なものであるが、離島・へき地の特性からさまざまな困難が生じている。特に、離島やへき地においては、従来型の都市部集中型機関研修体制を維持する限り、教員研修の充実を図ることが大変難しい状況である。それは、従来型の機関研修を中心とする現職教育制度の発想の範囲内では、教員の研修派遣によって、財政的にも学校内の補充体制にも支障があるからである。

機関研修の多くは、研修者が勤務する学校を離れて行なわれ、国、及び都道府県立の教員研修センターや都道府県教育委員会等の教員研修へのアクセスが課題となる。

本研究は、教員が在籍する学校において如何にして教育研修を充実させるかという視点から学校づくりを追究する。取り上げる学校は、学校内で

の教員研修において大きな成果を上げている。

しかし、離島・へき地の課題として都市部に集中する教員研修機関へのアクセスだけを問題にするとすれば、それだけを解消すればよいが、本研究で重視するのは、学校教育の充実という課題を子どもの学習する実際場面と切り結んで発想するという点である。単なる物的、人的問題や財政的問題であれば、今日しばしば話題となるような情報通信機器等の開発、普及によってある程度までは解決が可能であるし、実際にそのような状況があるかもしれない。しかし、それでは学校で学習する児童や生徒を変容させ、向上させていくということを学校現場の実際場面で追究することは出来ない。何より教師の実践的な指導力を向上させることにはつながらない。いかに精密な情報通信機器等が整備されても、教師と子どもとの接点を追究するには、授業や行事の実際現場に立ち会うことが必要となる。

これまでのように授業研究を授業から生産される授業記録等の分析、解釈のみをもってする立場からすれば、授業の実際過程に関わる必要はないが、本研究ではそのような立場を取らない。むしろ、積極的に子どもの学習する過程に関わることを重視する。そのような実際過程に関わることによって、予想もしないような事実(子ども集団が集中して自分の頭を十分に働かせて思考することや仲間との協力により自己の内面を思う存分表現することなど)が創造されることを目指すのである。

子ども集団が真に集中して学習活動に取り組む事実を抜きに学校教育を充実させることは、医療現場に例えれば聴診器を持たずに患者の顔さえ見ない検査結果重視型医療と同様である。本研究はそのようないわゆる調査結果型の、「科学的」研究の態度を取らない。

教育の世界において、幼児、児童、生徒不在の状況では、教育の事実を追究することが出来ないことは、いわば自明であるが、そのことが一般化しないことが今日の授業研究の一種の不毛状況を創り出しているといつてよい。その影響からか、都市部はもとより離島やへき地において学校内での研修が思うように充実していないというのが現

状である。

本年(2006年)7月には、中央教育審議会から「今後の教員養成・免許制度の在り方について」^{*1}の答申が出され、その柱の一つとして(教員免許更新制)が導入されることとなった。①教職課程の改善・充実^{*2}、②大学院レベルにおける高度教員養成制度の拡充(いわゆる教職大学院)とともに、3本目の柱として登場したこの制度は、一度は諸制度との関わりから導入に慎重な姿勢が打ち出されたものである^{*3}が、今回の答申によって、すべての教員に適用される制度として確立した。このことによって10年ごとに教員の資質や能力を確認(刷新)し、すべての教員を自信と誇りを持って子どもを指導していけるようにするというものである。このための講習内容についての検討が現在進められている^{*4}。そこで筆者は、子どもと教師の接点に関する講習、すなわち校内研修が充実する方向での講習内容を更新講習の内容とする必要性を感じている。

もちろん、教員免許更新制によってすべての教師の資質、力量が向上するというような安易な発想も困る。また、多くの教職課程に関する課程認定を受けた大学などがなると想定される更新講習開設者^{*5}の力量が直接的に反映するという意味からすれば、講習をまずは行なうことが大事である。これをきっかけにして、教員の自己研修への姿勢が前向きになり、意欲と自信とを持って教職生活を続けられるようになることが肝要であることはいうまでもない。

しかし、教員が自ら担当する子ども集団に対してどのように指導するかという実際場面についての学習を必ずやどこかで積んでいかなければならない。そのためには、学校内における研修活動を今後さらに充実させていかなければならないと筆者は考えている。

2) 離島・へき地における既成概念

筆者がこれまでに校内研修等がかかわってきた沖縄の学校は、いずれも離島やへき地とはいうものの、児童生徒数には比較的恵まれた中規模から大規模の学校である。したがって、離島・へき地の課題としてしばしば中心的話題となるような

複式学級における学習指導の工夫というような内容は、本稿では取り上げない。

複式学級のような学級編成上の課題は、学習指導においてしばしば克服の対象となってしまう、出来れば複式を避けたいというような学校や保護者の願いとなって、表面化する。しかし、複式学級という学級編成上の特例は、果たして克服されるべき問題であったり、複式学級という学級編成において特別な学習指導上の工夫が必要であったりするかといえば、筆者は違うのではないかという印象を持っている。

毎年初夏には、本学附属小学校において複式学級の研究が公開され、そこには多くの参観者がやってくる。筆者は1998（平成10）年秋に本学に赴任して以降、専ら共同研究者としてそこでの実践的な研究活動に参画している。その経験からすれば複式学級における学習指導上の課題というもの、翻って考えてみれば単式学級での課題と共通する。逆にいえば、単式学級において課題となるべきはずのことがらが複式学級の学級編成上の特色からいわば際だってくる。単式、複式のいずれの学級編成においても一斉学習指導を中心とするカリキュラム構成を採用する限りにおいては、生起する課題のほとんど全てが単式、複式の両方に共通の課題である。

例えば、複式学級においてしばしば指導の工夫として話題になる（間接指導）は、単式においては一斉学習指導における学習形態の工夫のひとつといってもよい。なぜなら、複式学級における間接指導がたまたま複数学年の児童によって構成される学級において、一方の学年を直接的に教師が指導している間、他方の学年では、児童が自主的に学習する時間が生じ、そのことを指して（間接指導）と呼んでいるからである。これは、単式学級においては、一部の児童に対して教師が学習指導を行なう間、間接的に指導される児童が必ず存在し、そのことを教師が意識するかしないかの違いであるといってもよい。

複式学級の場合は、複数学年の児童生徒が一学級を構成するという特性上、そのような間接的な指導の状況が際だって見える。いわば単式学級において、間接的な指導場が存在するのに、それ

が意識化されていないところに問題の核心がある。

時代はかなり遡ることになるけれども、大正期に児童の遊びなどの生活を学習に生かす試みを行なった池袋児童の村小学校は、そもそも学級という形態をとることをしない。ある時には児童が一人で学習し、またあるときには児童が教師の指導を受け、またあるときには、児童全員で教師から指導を受けるというように学習形態を柔軟に容許させた⁴⁶。この学校とは教育実践史上別の系譜に属する群馬県島小学校においては、斎藤喜博（1911-1981）が校長として赴任した1952年から11年間にわたって展開した学校づくりの中で、一斉学習指導のもとでの個別学習、相互学習、組織学習等のさまざまな学習形態を工夫した。その上で集団の長所を生かす学習指導を展開してきたという事実が存在する⁴⁷。

これらの実践例を見る限りにおいて、一斉学習、一斉授業を伝統とする日本の学校において、さまざまに工夫されてきた学習形態の中に複式学級形態は位置付く。いわゆる（間接指導）は、複式学級だけの専売特許ではない。

したがって、本研究では、離島・へき地特有といわれる複式学級に関する学習指導などの工夫に関しては、特に取り立てない。そもそも一斉学習指導を旨としてきた日本における学校教育実践の歴史的展開をふまえて、その中に含めて発想する。

2. 沖縄における学校づくりの展開

1) 教育実践の創造と教師たちの学習

沖縄では、1970年代に斎藤喜博（1911-1981）や林竹二（1906-1985）が安里盛市校長の勤務していた久茂地小学校を訪ねてから、本格的な学校づくり、授業研究が継続してきている⁴⁸。安里は、1974年に行なわれた教授学研究会の第1回夏の公開研究会に参加し、その後斎藤喜博を沖縄に招聘した。それ以前から沖縄には学校教育の充実に関して勉強熱心な教師達の存在があったが、斎藤や林の沖縄訪問によって、そうした個々の動きが集約された。一つの民間教育運動（沖縄第三土曜の会）として1977（昭和52）年から共同的な研

修活動が展開することになる。

沖縄県国頭郡伊江村立西幼稚園、西小学校における学校づくりの展開 (1997～2006) は、沖縄第三土曜の会の教師たちが継続的に行なってきた学習のひとつの成果である。このように教師たちの自主的な研修活動の展開の中から、一教師による一学級の教育実践にとどまることなく、ひとつの学校における授業や行事の改革に発展していったのが沖縄における学校づくりの特色のひとつである。このことは教育運動と学校づくりの原理や原則を考える上で大変重要な鍵となる点である。

沖縄第三土曜の会は、今日に至るまでほぼ毎月一回の研究会とともに、各会員の勤務する学校において児童や生徒が変容していく事実を捉え、その事実をもとに教育研究を行なうという方法によって学習活動を展開してきている。筆者は、1995年から3年半にわたって、同会の活動に直接的に関わり、その後、鹿兒島に移った後には主として会員の勤務校 (識名小、普天間小、浦添小、宇栄原小他) における研究活動に参加した。そこで会に参加する教師たちとともに授業や行事を充実させる研修活動に参画する機会に恵まれてきた。

その中で、つとに問題であると考えてきたことが、教員の人事異動の間隔と各学校における教職員の不協和音である。このことは、沖縄以外の地域においても同様で、必ずしも沖縄独自の課題であるとは言えないが、北海道や長崎、鹿兒島などの離島・へき地を多く抱える地域と同様にして、沖縄においては、そもそもが周辺離島から構成される県域である。従って沖縄本島に教育行政の中心があるとはいえ、ひとりの教師が教職歴を重ねていく中では、必ず周辺離島への勤務が義務づけられる。その点で会としての共同的な学習活動にさまざまな支障が生じる。逆説的にいえば、そうした困難さを当然のこととして受け入れ、努力しながら共同研究を続けてきたことが沖縄独自の運動展開の継続を保障してきたとも言える。

いずれにしても、会のメンバーは、周辺離島のみならず、沖縄本島内の各地域へと赴任することがしばしばである。公共交通機関が未整備である沖縄では、一度遠隔地に赴任してしまえば、実質

的に共同研究にかかわるのが難しい。

国頭郡伊江村は、沖縄本島北部の離島であり、ここに校長として1997 (平成9) 年に赴任した西江重勝は、会の中心的な役割を担っていた中で赴任する。当然ながら会としての共同研究が継続しにくくなったものの、そのことを逆手にとって同村内での学校づくりに邁進した。

つまり教育運動の形成としてはきわめて困難な道筋であるが、そのことがかえって各学校の内側で学校づくりに集中することを促した。その結果としていくつかの学校において充実した実践が展開している。

その中で、最大の課題は、教員の人事異動が短い周期で行なわれることである。

沖縄の場合は、校長職の場合、約2年で異動する。沖縄県の教職員人事制度としては、離島やへき地を除けば、5年程度の留任が可能であるが、実際的には多くの校長が着任から2年目に異動を申し出る。

これは、校長としての学校経営上の力量ということが直接的には関係する。しかし、これほど頻繁に校長が替わってしまうのでは、学校経営の方針が2年おきに変わるということになりかねない。小学校の場合には、児童が6年間在籍する。その間に三度も方針が変われば、見通しを持った学校経営など出来ないのではないか。

周辺離島においては、3年間の在職 (校長職) が限度である。このことは、現状ではやむを得ないことであり、そのために伊江村の場合は、西江校長が異動した (平成11年度) 後にも教育実践の継続ということを考えて、県教育委員会等の協力の下で校長人事をすすめた。振り返ってみれば、伊江村立西幼稚園、西小学校は、約9年間にわたって継続的に表現活動を中心とする学校経営を続けたことになる。その効果は、同敷地内の幼稚園における教育実践とともに、児童が進学する中学校での実践に対して、波及している。

後述するように西幼稚園、西小は、9年間一貫した学校経営を継続し、その結果として卒業生が通学する伊江中学校⁸⁹や同村内の伊江幼稚園、伊江小学校に大変よい影響が出てきている。中学校は、かつて生徒指導上の課題が山積し、基礎学力

の保障に相当な困難を感じていた。しかし、西小において充実した学習活動を経験した児童が中学校に進学して以降、まったく問題がなくなってしまった^{*10}。また、日常的な学習においてもよい影響があり、筆者が伊江中学校を訪ねたとき、授業中の生徒たちの様子は開放的で、かつ、明るく、大変集中力があつた^{*11}。

伊江村内の伊江小学校では、伊江村に在住する教職員の異動が同じ村内で行なわれる。西小から異動した教職員が伊江小においても授業づくりに努力したり、表現活動に取り組んでみることによって、いくつかの学級に力が付いてきた。そして、何より地域の保護者たちが西幼稚園、西小学校の学芸会を参観したり、その話を聞いたりすることによって、伊江小に対して充実した学校づくりを要請しだした。

もともと伊江村自体が一島一村であり、島全体に住民が交流する雰囲気がある。また、縁続きの住民も多く、学校での子どもたちの動静は、島に生活するものにとっては大きな関心事である。

沖縄において、筆者が実際に沖縄第三土曜の会に参加し始めた1990年代において、各学校の学校づくりがようやく始まりつつあつたのは、約20年間におよぶ沖縄の教師たちによる学習がその基盤にあつた^{*12}。そして、その学習はそれぞれの勤務校での教育実践に根ざし、勤務する学校において児童や生徒をいきいきと変容させるということを基本原則として展開してきた。

いわば、ここでの学習の基盤には児童生徒（子ども）があり、その児童生徒の発達に責任を持つということが貫徹している。そして、そのことは何よりも各学校において実現される。そして各学校の実践を充実させるためには各教室での実践を追究する以外に方法がない。こうしたところに集中し、教師たちの学習が実のあるものになったからこそ、それが伊江村西幼稚園、西小学校の他、那覇市識名小学校、宇栄原小学校などの学校づくりへと継続していった。

筆者が同村を訪ねた本年（2006年）1月下旬には、ちょうど伊江中学校の生徒達が国頭郡内の音楽会に出かけ、島に帰ってきたところに出会つた^{*13}。たまたま本部港から乗り合わせた伊江村営

フェリーに伊江中の生徒たちも乗り合わせていたのである。船が伊江港に着くと出迎えに来た保護者たちと話をすることがあつた。その時の話によれば、今回伊江中の代表として郡の音楽会に参加した生徒は、西幼稚園、西小で表現活動を経験した子たちである。同学区内の伊江小学校から伊江中に進学してきた子たちは、伊江小において西小から異動した教師に受け持たれていた。そしてその生徒たちは、伊江中学校に進学すると一年生の時から校内合唱コンクールで学校代表となり、今年、再び学校代表となって2年連続して国頭郡音楽祭への出場を果たした。

この子たちは、昨年秋に同村を訪ねた際に、同行した梶山正人に歌声を聞いてほしいと言い出して、西幼稚園、西小学校の校内特別研修会の合間を縫って学級の合唱を聴かせに来た生徒たちである。この生徒たちは、小学校時代の表現活動で梶山の作品に取り組んだり、また、直接梶山の指導を受けたりしてきた。そこで、西幼稚園、西小での校内研修会に梶山が来ることを知り、生徒たち自身から自分たちの合唱を聴いてほしいと願ひ出た。

校内特別研修会では、小学校の児童が行なう表現活動の練習の中で昼休みだけが唯一の休憩時間であつた。その時間帯に伊江中の2年生が合唱をしにやってきた。指揮をする梶山の脇で筆者は生徒たちの表情を見たが、身体全体を上手に使いこなし、実に澄み切った表情で元気のある、はつらつとした中学生らしい歌唱であつた。

子どもたちの可能性というものは、教師によっていかようにも引き出される。幼稚園や小学校で充実した学習活動を経験した子たちが中学校に進学した後に、自己をはっきりと表現し、生き生きと学習している事実がこのように存在する。

2) 学校づくりにおける校長の役割

西小、西幼稚園における学校づくり（1997-2006）は、校長として赴任した西江重勝が中心となり、展開した。西江は、赴任当初から学校内外において授業や学校行事を中心にした学校づくりを行なおうとして相当な努力をしている^{*14}。

例えば、学芸会の改革である。筆者が訪ねた

2000 (平成12) 年春^{*15}には、いくつかの学年や学級で一般的な学芸会の演目である合奏や民俗舞踊、児童演劇などに取り組んでいた。その児童の表現は、いずれも通俗的であり、児童の原案を教師が脚本化したり、大人向けのを子ども向けに翻案したり、大人向けのをそのまま子どもに当てはめて行っていた。したがって、西江が赴任した後に取り組んでいた子どもの合唱やオペレッタ、総合表現などの生き生きとした内容との差というものが歴然としてあった。

明白であったのは、一般的な演目に取り組んだ学級の子どもは、派手な衣装を身につけ、化粧をし、かえって子どもらしさ、児童としての身体の美しさを隠してしまうようなものを身につけていた。そして、演技や演奏の最中にも、普段身につけないようなアクセサリや髪飾り、衣装などが気になって仕方なく、演技や演奏に集中できないという状況がありありと看取された。

西江校長時代 (1997～99年度) の当時の西小学校はこのような実情であった。そのなかで校長の苦悩というものは、相当なものであったと思われる^{*16}。

しかし、思い切った学校行事の改革は、それを経験した児童や保護者たちからの圧倒的な賞賛を得る。その効果が次第に学校の内外に広まっていく。そして、その学校づくりの仕事が、前述のようにその後2人の校長にバトンタッチされ、9年間にわたって継続する。その間に若干の変節はあるものの、一貫して授業と行事の充実により、子どもたちを生き生きとさせる努力が継続してきた。

学校づくりにおいて、校長の役割は実に大きい。筆者が2001 (平成13) 年から3年間にわたって関わってきた横須賀市立森崎小学校は、校長の発案によって校内研修の改革を大胆に進めた。その結果、教職員が団結し、児童の姿そのものが明らかに明るいものにかわっていった。筆者が訪ねたのは、校長がこの改革を始めた当初 (2001年6月～) であり、まだ先が見えないような取り組みの時期であった。それでも学期ごとの研究授業や夏休みに集中的に取り組む校内研修会などを通じて、次第に教師たちが授業づくりの意欲に燃え、

学校が変容していった。

この学校の場合には、校長が大変勉強熱心であり、教育の理論や実践に関する文献をよく読んでいたことから、このような学校改革を行なうようになった。このことから見ても、校長の役割というものの大きさを実感する。

校長のリーダーシップがない場合に教頭や教務主任などの学校運営の中心となる教員が中心となり、学校づくりを展開した事例は、沖縄においてはいくつか存在する。一つは普天間小学校であり、この学校では、教頭と研究主任が協力し合って授業を核とする学校づくりに取り組んだ。また、現在学校づくりが展開しつつある宇栄原小学校では、沖縄県初となる民間人校長を迎えて、校長をサポートする教頭と教務主任が一致団結して学校づくりに取り組んでいる^{*17}。宇栄原小では、一部教員の根強い反対にあったものの、次第に授業づくりを中心にしながら、若い教師たちを中心に勉強が始まった。民間出身の校長自身が若い教師たちとともに学校づくりについて学ぶことを通して、学校全体が生き生きとした雰囲気になってきている。筆者は普天間と宇栄原のそれぞれに関わってきた。いずれにおいても、教師が変わることによって、学校自体の空気が一変してしまうということを実感している。

3) 外部講師が参加することの意味

筆者をはじめ、教育の実践家や研究者が参加して行なう特別研修会は、学校づくりにおいて大きな意味を持つ。一般的にいて、地元教育事務所や教育委員会の指導主事を招いて行なう研修会など、どの学校においても教師たちが学習し合う場はあるが、その学校の教師と外部講師とがお互いに同じ立場で学習し合うのは、実に難しい。

筆者が関わってきた事例では、外部講師が学校に来るとなれば、学校側としても相当な緊張感が広がり、児童生徒や教師たちは日頃とは違うことをしようとしてしまう。筆者自身は、かつて中学校に勤務していたときに同様のことを感じた^{*18}。これは説明するのがなかなか難しいのであるが、指導主事の訪問を要請したり、外部講師を招くということになると、どこか日常的な教育実践の枠

組みを超えたところで研修するというような空気になる。それが、同じ教員の場合であっても同様であり、ましてや大学の研究者を招請するとなれば、相当な精神的プレッシャーを感じてしまう。

それに対して、沖縄第三土曜の会の場合には、これは教授学研究の会の全体としてそう言えることであるが、外部講師を同じ立場で学習するものとして迎え入れる。したがって、筆者は学校現場の教職員とともに授業を行ない、ともに汗を流しながら教材を研究し、児童の状況を把握する勉強をする。先輩の実践家や研究者の場合には、授業などの指導においては、相当な力量があり、そういう人たちとともに同じ立場に立って授業について学習し合うのは、相当な覚悟がいるが、しかし心をひらいて参画し、成功した際には、大きな成果と喜びとを味わうことが出来る。

そういう意味で外部講師の参加は、大変重要である。また、そこには参画するもの同士が同じ立場に立つという大変重要な原則がある。

3. 学校における研修を深める意味

1) 実践家と研究者の関係

教育研究の在り方を模索し、自ら実践者、研究者として授業研究をすすめた斎藤喜博は、研究を専業とする大学の研究者が授業研究に関わること、学校づくりに関わることを強く推奨した。そして授業づくりを通して具体的に授業研究をすすめること、授業中に生起する事実を捉え、その事実を変革する努力を授業者のみならず参観するものも協力しながらすすめることを提起した^{*19}。

沖縄における学校づくりは、この原則の下ですすめられている。中心となっているのは教授学研究の会に参加した教師たちであり、そこに研究を専業とするものたちが自ら授業をすることを通して、また、授業者の行なう授業に参加し、研究をすすめるというスタイルである。

筆者が沖縄の学校と直接的な関わりを持つようになったのは、筆者自身が1998（平成10）年から教授学研究の会に参加し、授業そのものの研究に関与するようになってからである。特に、教授学研究の会が行っていた〈授業を学ぶ会〉への参加により、沖縄以外の実践家との交流が始まった

こと、その後の斎藤喜博研究会^{*20}への参加（2002年～）により、教授学研究の会において研究者と関わるようになったことが大きい。そして自らの研究として生活綴方、生活教育、斎藤喜博、授業研究史をテーマとして持ったことによって、広い意味での教育実践史研究へと展開した。

いわば、学校をフィールドとする授業研究を動的な研究と捉えれば、歴史的事実を含めた教育実践史が静的な研究である。この動静二つのテーマが両輪となり展開することになった。

従って、沖縄の学校づくりへの関わりは、筆者自身の授業に関する学習となっている。そしてこれが教育実践史として刻まれていく学校や教師の歴史とその歴史の生産現場への直接的な関わりとなっている。

2) 研究者としての関わり方

研究者として学校づくりに関わるという場合に、一般的には研究者が参観者、授業分析者として傍観者的に関わる場合が多い。そうした研究の態度がこれまでの教育学研究における授業研究の内実を規定してきた。

今日において、教育方法に関する専門学会において報告される授業研究では、授業自体を固定的に見て、そこから生産される事前、事後の分析結果、あるいは、その分析方法に関する研究が主流である。このことは、医学研究においていえば、臨床と病理の乖離とってよい状況である。教育の場合の実践と理論の乖離は、かなり深刻な状態である。

近年、臨床教育という分野が登場し、理論と実践の融合化が図られるという期待があったが、この動きは、カウンセリングや教育相談など個別的、症例的な実践研究分野で、実際的な授業場面のように子ども集団の思考過程を動的に把握するようなところに至っていない。従って、もともとオープンエデュケーションなどに特色のあるプログラム学習などの学習を個別化する実践展開が稀である日本の教育実践においては、臨床教育と授業研究がまったく昇華し得ない別物となってしまう。ちなみに、宮城教育大学では、大学院修士課程の科目として「臨床教育研究」を複数

コマ開講し、筆者は、1992～93年度に参加したが、学校や教育委員会との連携により、実際的な授業研究を行なう演習的な科目であった。この科目名は、実際的には教育実践研究の方がふさわしい^{*21}。

教授学研究においては、斎藤喜博が指摘したように研究者の協力によって、真に実践的に意味のある理論の構築が図られる。そこでは大学において研究を専業とするものが自ら授業の世界に飛び込んで、実践家と同じ立場で授業に参加することが求められる。このことは、授業外を主な実践の場とする臨床教育と呼ばれる研究分野とは異なる。授業において子どもが集中して学ぶ事実を創造するという仕事に実践家とともに入り込むことによって、教授学自体の創造、応用に関わるということになる。

そして、ここで重要となることは先述の通り研究者と実践家とがともに同じ立場で学び合うことである。学校づくりにおいては実践家が行なう授業や行事の仕事に関して、研究者が同じ立場でその現場に関わる。そして実践展開の方向性について実践家とともに子どもの事実を捉えながら協力して検討することが必要である^{*22}。

3) 実践家としての関わり方

教授学研究の会の場合、実践家が次第に学校づくりに関わるようになり、いくつかの学校で指導的な役割を担っている場合がある。沖縄の場合では、実践家が招かれ、筆者自身はその中から大変さまざまな示唆を受けているが、しかし筆者が見た限り示範授業や介入授業等において実践家の見事な授業展開だけが一人歩き、そこに生起する子どもの事実そのものに参観者の関心がいない場合がある。ことに、実践家は授業を展開する優れた技術を豊富に持ち、授業中の子どもを如何に生かしていくかというところに最も力を入れるために学校づくり全体への目配せや学校における研修の在り方そのものへの配慮という点において課題がある。

確かにすぐれた実践家の目覚ましい授業を見ることは大事である。その中で学習することが少なくないが、そのことをきっかけにして学校として

の研修や日々の授業改善にその成果が継続しなければ、一過性のイベントとなってしまふ。

沖縄における学校づくりにおいて、今後の大きな課題は、このことの解決のために沖縄の教師たちが覚悟を決めることである。学校づくりの手法は、これといった決まった方法があるわけではなく、子どもたちの実態に合わせて、その子たちを如何に生かすかということ日々実践を通して考慮していくしか道はない。従って外部講師にだけ頼っている、特定の意欲ある教師だけが自己の実践に満足し、学校としては何ら実践の展開が見られないという場合が多く存在している。学校長の下で授業を軸にする学校づくりを行なうという決意とともに、その中でいかにして日常的な授業実践を高め合っていくかというところに学校づくりのよさがある。学校づくりの成果を子どもの上に実現することのみが教育実践の評価を固めていくことにつながる。ただ単にペーパーテストをしてその結果が向上したとか、大会で優秀な成績を収めたというようなところに安住するのではなしに、子どもの姿をよりよいものに変容させていくことが学校づくりにおいては求められる。

4. 伊江村立西幼稚園、西小学校による学校公開研究会

1) 表現活動(オペレッタ)の事前における手入れ

先述の通り、1997(平成9)年4月に校長として赴任した西江重勝が学校経営の中心に表現活動と授業の充実というテーマを掲げて以来、9年間にわたって継続してきた学校づくりの総まとめの会(学校公開研究会、2006年2月3日)が行なわれた。その後、校長は2回人事異動により交替したが、一貫して同様のテーマによる学校づくりを展開してきた^{*23}。

西幼稚園、西小学校の学校公開研究会の当日、子どもたちが毎朝登校して、上履きに履き替える玄関が校舎の西側にあり、その場所がオペレッタによる表現活動を発表する舞台となった。西小学校の4年生がこの舞台を思う存分使いこなして、オペレッタ「大工と鬼六」(梶山正人作曲^{*24})を見事に演じきった。

この日(本年2月3日)は、あいにく天気が悪

く、相当に厚い雲が島全体を覆い尽くしていた。学校公開研究会のプログラムの冒頭に演じられる「大工と鬼六」の野外劇を成功させるために天気の状態が最も気になった。当日の朝、宿舎から学校に向かう最中から、同行した川嶋環は何となく空を見上げては心配そうな顔をしていた。

川嶋は、1956（昭和31）年4月から自ら希望して斎藤喜博が校長を務める群馬県島小學校に赴任した教師である。それ以来教授学研究会の会に参加しながら授業を追究する仕事を継続してきた。西幼稚園、西小學校に継続的に入り、学校づくりに関わってきている。

本部町の港から伊江島へとやってくる一番のフェリーが伊江島港に到着し、港からは西小の教頭や伊江村役場の職員が運転する車で参観する人たちが次第に西幼稚園・西小へと集まってきた。西小4年生の児童が表現するオープニング野外劇「大工と鬼六」の会場となる校舎前は、参観する人たちに取り囲まれるような状態になった。今回の学校公開研究会における一番最初の演目が西小4年生による「大工と鬼六」で、その開演直前の総練習の場所に参観する人たちが次第に集まってきた。港と学校とを往復する自動車が校舎の前まで乗り付けるが、そのことなどまったく意識しないほど、4年生の児童は自分たちの表現に集中していた。しかし、あまりの緊張感のために「ゲッタゲッタ……」と鬼が大工をあざ笑う場面では、すっかり身体が萎縮してしまい、その仕草は子どもたち同志がお互いに仲間を励ましているのかのように見える。

野外でのオペレッタの表現活動を学校公開研究会の場で公開しようと提案したのは、故郷の伊江島に校長として赴任し、1997（平成9）年から3年間にわたって、西幼稚園・西小學校の学校づくりを展開し、その後2回にわたる校長の異動の際には、学校経営方針の継続に心をくだいた西江重勝校長（当時）であった。

筆者の記憶によれば、昨年（2005年）秋の同校における校内特別研修会の席でこのことが話し合われた。

それを本番の学校公開研究会の場で見事に実現させた西小の児童の力というものに驚かされた。

子どもというのは、大人の予想をはるかに超越するような力量を本番の舞台上で発揮するものであり、そうした予想もしないような出来事を創造するということが学校教育の大事な仕事のひとつである。

伊江島の船着き場から徐々に集まってきた参観者が、舞台となる学校の昇降口で野外劇場の反響板のように屹立する学校の校舎に向かって弧を描くように児童を見守っている。そこは、中央の松の木を中心にしたアスファルトのロータリー式通路である。通路の後背部が校舎へと続く階段となっている。そして、この階段がオペレッタ「大工と鬼六」のクライマックスを飾る（橋架け）で重要な舞台装置となる。

西小の校舎からは、廊下側に面した窓に休み時間を過ごす西小の児童が鈴なりになり、4年生の成功を祈るようにしてじっと見守っているのが見える。

次第に足下から忍び寄ってくるような緊張感が玄関前にしつらえられた大舞台を満たした中で、本番さながらに行なわれた試演の後で川嶋が通路の中央に集まった4年生の児童に「みんな、ゲッタゲッタ遊びをやるか」と話しかけた。4年生の児童は、突然の川嶋のことばが理解できないという様子できょんとしている。舞台となる校舎前の広場に集まった参観者は、児童と同様にこれから何が始まるのだろうかと固唾を呑んで見守っている。川嶋は、児童の極度の緊張感を解消させようと、とっさに「大工と鬼六」の中の、児童の表現の中で特に手入れが必要な場面であった「ゲッタゲッタ……」と〈鬼〉が〈大工〉を嘲笑する場面を取り立てて、それを素材にし、とっさに〈遊び〉を思いついたのであった。

このことは、事後に川嶋より聞いたのであるが、〈遊び〉によって子ども本来の素直な感動が表現に表われることを期待したということであった。

川嶋は、児童に向かって、「だって、みんな、ゲッタゲッタというのは、鬼が大工のことを馬鹿にするんでしょう。じゃあ、先生が大工になるから、みんなは鬼になって先生のことをゲッタゲッタと馬鹿にしてみてください。先生とみんなのどっ

ちが勝つか、勝負しよう。よーしやってみようという人はいない？」と、児童をすこし挑発するような感じで、しかし、明るい表情で川嶋は4年生の児童に優しく話しかけた。

川嶋のこの一言で先程まで妙に力んでいた児童は、すっかりリラックスしたように見えた。そして、何人かの児童が川嶋が演じる〈鬼〉に挑みかかったが、さすがに川嶋の迫真の演技に圧倒され、挑戦した児童の演じる鬼はすっかり退散してしまった。それでも「ゲッタゲッタ……」遊びの効果は絶大で、子どもたちはすっかり笑顔に変わってしまった。

すると、そこへ間髪入れずに近くで見ていた西岡陽子が名乗りを上げた^{*25}。西岡は、自身が西小に何度か来訪した経験を持つこと、大阪の学校では〈ニシゴン〉というあだ名を付けられ教室の児童から呼ばれていたことなどを実に巧みな話術で、非常にユーモラスに話しながら、西小の4年生の児童が川嶋に負かされてしまった原因を「みんなは、川嶋環先生の目を見るからあかんの、環先生は私の師匠ですよ、ベテランの環先生の目を見るから、圧倒されてしまうんよ」と指摘した。そして、川嶋のへそを見ながらやれば怖くないと言い、実際に西岡は川嶋を圧倒するような調子で、「ゲッタゲッタ……」と演じてみせた。

この出来事は、実際には実に短時間の出来事であった。川嶋は、最後の練習をしている4年生の課題を瞬時に読みとり、とっさに課題を克服させるための活動を創り上げた。児童の状態を察知する眼力と、そこで児童自身に自己の課題をとっさに克服させ、乗り切らせてしまう力量は、数多くの実験場面を通して形成される。更にはそこへ本当に絶妙なタイミングで横口を入れ、視線を定めることの大切さを指導してしまった西岡の指導力というものは、同様にして実際的な授業の研究を継続してきたことによって身につけてきたものである。

2) 子どもの事実に対応する指導の在り方

西幼稚園、西小学校の学校公開研究会当日の朝一番には、西小2年生の児童によるオペレッタ「かさじぞう」(梶山正人作曲^{*26})の最終練習が

あった。2日前(2月1日)の練習では、すでに表現が完成してしまい、後は当日まで児童の気持ちを高めておくくらいでよいのではないかと、手入れをした川嶋が受け持ちの教師に話したが、最終練習の時間に体育館に行ってみると2年生の子たちは、練習のちょっとした合間に体育館の入り口のお手洗いに走っていく。川嶋は、その様子を見ながら、「子どもたちがずいぶんと緊張していますね」と小さな声で筆者に耳打ちした。

2年生が演じるオペレッタの練習の様子を見ると、確かに2年生の児童は一所懸命にオペレッタに取り組んでいるが、何となく外部からの強制によって演じているというような感じがある。どことなく不自然な動きがあり、2日前には実在的に級友との距離を把握しながら「かさじぞう」を表現していた児童が、時々正面衝突し、自己の動作に対して自信がないというような様子である。全体的にぎくしゃくしているように見えた。

2年生の練習が一段落すると川嶋は即座に児童を集合せ、「楽しいゲームをやりませよ」と話しかけた。そして、ピアノの伴奏に合わせて自分の考えた方向に歩くよう児童に言い、そして、〈だるまさんが転んだ〉の要領で、ピアノの演奏が途中で急に止むのを合図に、その場でびたっと止まる、というゲームを急遽創り出した。

2年生の児童は、直前まで練習していた「かさじぞう」の表現練習の時とはうってかわって、楽しそうな表情で歩き始めた。ピアノの演奏が止んだ後で、もしも身体が動いてしまったら、〈ドブ〉に座って、みんながやるのを見ている、という罰ゲームがよほど気に入ったらしく、とうとうこの遊びの最後にはすっかりリラックスしてしまった。

この〈ドブ〉というのは、体育館の床に白い線で描かれた真新しいバスケットボール用のシューティングサークルをとっさにそう名付けてしまったものである。そしてそのドブには、少し落ち着いたのなかった児童がひとりだけ入ることになったが、それでもその子はみんなの遊びを見ながら、楽しそうにしていた。

この時、川嶋は途中から変化をつけて、歩くと

いうことから発展させ、スキップを取り入れた。すると、先程から楽しそうに参加していた2年生の児童たちは、ピアノの演奏に合わせて楽しそうにスキップするうちに、すっかりよい気分になったのだろうか、いつの間にか誰ともなしに「かさじぞう」のテーマとなる歌を楽しそうに歌い始めた。先程までの練習の時の何となく不自然な感じは、いろいろと表現を工夫するうちに細部にこだわり過ぎ、工夫のし過ぎになってしまったために、子どもらしい自然な動きがなくなってしまう、〈無理にやっている〉とか、〈やらされている〉という感じになってしまったのである。

この時は、実に自然発生的に、2年生の児童の歌声が生じた。誰言うともなしに、自然に、どこからともなく沸き上がってくるというような、不思議な美しさのある、透き通った歌声であった。子どもというのは、どんなに無理矢理にやらせようとしても、出来ないのは当然で、その反対に教師が無理にやらせようとしなくとも、その気になりさえすれば、実感のこもった素晴らしい表現をする。

学校公開研究会当日の最終手入れは、西小6年生の児童による総合表現「プロメテウスの火」の表現であった。3日前（2月1日）の公開事前研究会で初めて歌った序曲（燃ゆる火）に6年生が挑戦してみるということ、そして、それを実際の学校公開研究会の場でとうとう6年生が見事に歌いきってしまったこと、なんといってもこの一連の出来事が今回の公開研究会での大きな収穫となった。

学校公開研究会が行なわれた金曜日（2月3日）に先だって、火曜日（1月31日）から最終の校内特別研修会が行なわれた。表現活動や算数、体育、国語、社会など西幼稚園と西小の先生方が公開する一般授業の他、オペレッタを発表する幼稚園と2年生、4年生、総合表現を発表する6年生について、それぞれ学び合う時間をとった。

2000（平成12）年春に伊江島を筆者が訪ねた時には、西幼稚園、西小（当時、西江重勝校長）では表現活動を中心に、学芸会の充実を目指しており、参観した学芸会においては、一部の学年を除いて、オペレッタや総合表現など、子どもたちが

全身を使って表わす表現活動の様子を見る機会に恵まれた。

この当時は、校長の西江が伊江島に赴任した後、3年をかけて創り上げた表現活動を発表するというもので、今回はその積み上げを土台にして、その後の6年間の成果を授業や表現活動の発表を通して見ることが出来た。

6年生は、火曜日の一校時目に西幼稚園・西小のトップバッターとして事前の校内特別研修会を行なった。今年度新造された体育館の広いフロアを十分に活用した「プロメテウスの火」は、さすがに素晴らしかった。

勘定してみると、現在の中学1年生が平成11年当時幼稚園生で、この6年生はその翌年2000（平成12）年4月に幼稚園に入園した子たちということになる。それから7年間にわたって、一貫して表現活動を追求し、この子たちの素晴らしい動きというものが長い時間をかけて形成されてきたものだということが納得できる。

事前の打ち合わせで判明したのは、この作品の序曲にあたる「燃ゆる火」（「かしの木」として単独にも歌われる）を省略する案である。第一曲目の「海よ」から始めるというが、6年生担任の意見であった。

念のために『丸山亜季歌曲集Ⅱ』（一ツ橋書房、1986年）を見ると、確かに「かしの木」は、「プロメテウスの火」とは別に記載されているが、手許にある練習用の、おそらく丸山亜季自筆の楽譜には、間違いなく「序曲 燃ゆる火（かしの木）」と手書きで書き添えてある。そこで研究主任の玉城睦子教諭と相談した上で、事前研究会の時に合間を見つけてこの序曲が歌えるように練習しようということになった。玉城は正直なところ心配そうな表情をしていたが、川嶋や西江の「大丈夫ですよ、子どもはきっと出来ます」という言葉にほっとしたのか、いよいよその準備を整えて火曜日の事前研究会当日を迎えた。

その日は、早朝ということもあってか、6年生はどこか気持が別のところにあるような雰囲気であった。

そして全曲を表現し終えた後で川嶋は、「プロメテウスの火」の精神的な部分について6年生の

児童に話した。この作品は、人間が知恵を授かりこの世の文明を築いていくという話であり、人間と動物との違いということを考えるものであるということ、そして川嶋が持参してきた京都東山動物園で飼育されているゴリラの手形(コピー)をみせ、その特徴から人間とゴリラとの違いに思い至らせ、更には王貞治選手の足形のコピー—このコピーは子どもたち(特に男子児童)の心をすっかり掴んでしまったようである—を見せながら、「6年生のみんなが人間としてこの場所に立ち、自分を大事にしながらか人間の起源を表現するのではないか」ということを短い時間のうちに話した。そして、その上でいよいよ休み時間を迎え、この作品の主題となる序曲「燃ゆる火(かしの木)」の練習をすることになった。

移動用の黒板に貼り付けられた模造紙には、玉城が練習の合間に転記した序曲の歌詞(斎藤喜博作詞)がはっきりとした力強い文字で書かれている。

「かしの木の／しげれる庭の／空の上／鳥はとびゆく／高きもの／見つめながらに／もゆる火を／もとめてゆかん」

最初は、ピアノで旋律部分を演奏し、歌詞を見ながら心の中で歌ってみるように川嶋は6年生に指示した。ところが6年生の児童は初めて聞く旋律と共に微かな声ではあったが「かしの木の…」と歌い出している。そしてもう一度それを繰り返すと、今度は何人かの児童がはっきりと聞きとれる声で歌いきってしまった。つつい聞いていた筆者の方が6年生の児童につられて歌ってしまったほど、その歌声は自然に出てきた。

3回目は、歌詞を見ながらピアノの演奏する旋律に合わせて歌ってみた。6年生の児童たちのほとんど全員がすっかりこの曲を覚えてしまっている。そして4回目は、ピアノから遠く離れた体育館の南端に移動して、ピアノの側で指揮をする川嶋に声を届けるようなつもりで練習した。この間、だいたい5分くらいであったと思うが、6年生の児童たちはすっかり歌詞や旋律を覚え、その上、非常に満足したような上気した表情に変わっていった。

3) 学校公開研究会における直前の指導

そして6年生の最終の手入れ(公開当日の朝)となった。あと1時間もすれば、いよいよ学校公開研究会のオープニングオペレッタ「大工と鬼六」(西小4年生の児童の表現活動)が始まる予定である。ところが一通り「プロメテウスの火」を演じきった6年生は、2年生の〈かさじぞう〉の時と同様にして当日までの間に細かな構成に変更があり、新しい動きが加わり、細部にこだわるあまりかえって子どもらしさ、すがすがしさが失われてしまったような雰囲気であった。特に序曲の「燃ゆる火」の最初の出だしの音にインパクトがないという感じである。川嶋は、一緒に見ていた西岡に急遽バトンタッチして、「かしの木…」の出だしの音を練習してみるように言った。

西岡は、先ほど昇降口の前で行なわれた野外オペレッタ「大工と鬼六」の最終手入れの際に4年生に行なったみごとな〈ゲッタゲッタ……〉の横口と同様に〈ニシゴン〉流の自己紹介をさっさと済ませ、6年生が二本の足で大地を踏みしめて立っていることの素晴らしさ、人間として生きていることの素晴らしさをこの歌を通して表現しようと身体全体を左右に大きく揺さ振りながら話しかけた。そして、両手を天に向かって突き上げるように動かしながら、「大地からすべてのエネルギーをもらったつもりになって、足の裏から頭のとっぺんに向かってその力を吸い上げて、その勢いを支えに出だしの音を頭のとっぺんから突きあげてみよう」と6年生に話しかけた。

そして息を吸い上げる動作をまさに斎藤隆介が描く「八郎」の如く、すさまじい形相で全身そのイメージを示しながら歌い出しの練習をした。前奏なしでいきなり歌い出すこの歌の難しさなど、まったく意に介さないというような雰囲気、6年生の児童たちは、飛び入りのニシゴンの迫力のある指揮、というよりは大地を揺るがすような激しい身体の動きにつられて、みごとに「カー」の音を歌いきってしまった。

西岡は、この歌を指導する場面は何度か見たことはあっても直接自分が指導するのは初めてだとこの会の後で話していた。

とっさに児童の課題を発見し、それをイメージ

豊かな説明によってすっかり乗り越えさせてしまうという教師の技術は、ただ単に他人の仕事を真似することからだけでは生じない。児童の実態を踏まえて、児童を更に向上させていくために必要となる次の目標（教師から出す要求）をひとつだけとっさに設定し、そのことに焦点化して短時間のうちに集中した学習活動をつくりあげるという原則^{*27}が、その根底にある。

6年生の児童が3日前に初めて習った「燃ゆる火（かしの木）」の歌をあっという間に歌いこなして自分たちのものにしてしまったのは、児童の力を信じるこれまでの積み重ねがあつてのことである。子どもは教師の予想を遙かに超えて、素晴らしい姿を示すという確信が指導の背景に原則として存在していた。そして、とっさに指名されて飛び入りで指導をした参観者の西岡が4年生や6年生の児童の状況に応じて柔軟に指導を展開できたのは、決まった方法を適用しようとはせずに子どもの状況に応じて瞬時に指導方法を工夫したからである。

西岡は、児童の課題をひとつだけ取り上げ、具体的な説明と身体全体を使った指揮によって、子どもの力を引き出した。そして今までにはなかったような新たな力を6年生の表現の中に創り上げた。

こうした教師の技術は、西岡が言うように実際的な場面に立ち会い、そこで実際に学習しあうことによって形成されるものである。

そして何より6年生の児童たち自身が、「燃ゆる火（かしの木）」を歌い終えた後で（達成感があつた）とその喜びをことばにして表現していたことは特筆すべきである。これは歌い終わった6年生たちに西岡が感想を求めた際に出てきた声である。

「プロメテウスの火」を表現し終え、自分たちのために自分たちの表現をしようという意気込みが6年生の児童たちの退場するすっきりとした姿に見ることが出来た。授業や学校行事を通して自分を高め、自分を表現した子どもたちというのは、いつ見ても本当に美しい。

4) 授業づくり—授業案づくりと授業の検討

伊江村立西幼稚園・西小学校の学校公開研究会における一般授業の公開では、国語や算数、体育に取り組んだ西幼稚園や西小の教師たちが、一日と成長していった。中でも1年生の算数の授業に取り組んだ教師は、事前に行なわれた校内特別研修会で公開当日の直前の授業をやってみた上で、予め用意していた公開研究会当日用の指導案をすべて捨て去り、新しいものを創り上げた。

1月31日から学校公開研究会に先立って行なわれた校内特別研修会における1年生の授業は、算数の「異種の減法」という箇所（チューリップとチョウチョウの数を比較し、どちらがどれだけ多いかを考えさせ）た。事前の打ち合わせでは、引き算と足し算とを一時間でやってしまうという計画であったが、両方やるのは難しいということとなり指導案を一部書き換えた。

その授業の中で児童が出した考え方は、幾通りかあったが、その中から教師はブロックを使って解いたものと図に表わして考えたものを取り上げた^{*28}。

中でも図を書いて考えた二人の児童の考えは、その背景にある論理がかなり異なっているように見えたが、この後この考えをどのようにして授業展開に生かしていけばよいのか一瞬躊躇する場面があった。ここで、担任の教師は川嶋にバトンタッチした。児童の考えを出したところまではよかったが、この後どのようにして子どもの考えを他の子どもと関係させていくかということが難しい。

川嶋は、それぞれの児童に実際のチューリップとチョウチョウの絵を使って、具体的に自分の考えを説明させた。画用紙に描かれた児童の説明図は、やや抽象的で、それをもとにしては次第に学習対象があいまいになってしまうと考えたのだろう。そして教室の児童たちには、これから黒板の前に出てする友だちの説明が自分の考えと同じかどうかをよく考えながら見ているように指示した。

最初の児童は、チョウチョウの方にチューリップが描かれたカードを引き寄せ始めた。黒板に貼付けたチョウチョウの絵に重ねるようにして

順々にチューリップの絵を重ねていき、そして、すべてのチョウチョウのところと同じようにチューリップを渡し終えると、残ったチューリップの絵を数え始めた。この児童の場合は、〈すべてのチョウチョウに平等にチューリップをあげる〉というように考えている。川嶋がそのようにその児童に尋ねるとその子は嬉しそうにしながら小さくうなずいた。そして、川嶋は、この子が画用紙に描いた図を指さしながら、チョウチョウに向かってチューリップから〈矢印〉が向いていることを確認した。この矢印の意味が、「チョウチョウにチューリップを一本ずつあげる」という意味だということがここで明確になった。1年生の児童たちは黒板の子と同じというような声をあげながら、黒板に貼り出された画用紙をじっと見つめている。

重ね合わされた絵を元通りに直すと、今度は別の考えを出したもう一人の児童の出番である。今度は、さっきの児童とは反対にチューリップの絵の方にチョウチョウが描かれたカードを引き寄せ始めた。この児童は、「一本のチューリップに一羽ずつチョウチョウがとまる」というように考えている。そして、すべてのチョウチョウが平等にチューリップに留まれるようにすると、今度は残ったチューリップの本数を数え始めた。さっきの子とはやり方は正反対であるが、この方法でも出来ることが分かった。そして、川嶋はこの児童が画用紙に描いた図にある〈矢印〉を指さしながら「チョウチョウからチューリップに向かって矢印は、チョウチョウがこのチューリップに留まるという意味なのですね」と確認した。教室の児童たちは、それぞれうなずきながら川嶋の話の聞いている。

この後、川嶋は再び担任の教師とバトンタッチし、最後のまとめをした。1年生の児童たちは、教室の黒板のところで説明した仲間の考えと同じだったという表情をしてみな満足そうにしている。そして、考え方の異なる二人の意見が出て来たことで、同じ問題でも違うやり方があるということに彼らは興味を持った。そして、何よりも自分が友だちと同じ意見だったということが面白かったようであった。

川嶋は、授業の後で授業を組織化ということがこの学校のこれからの課題であると指摘していたが、子どもの考えを組織し、質の高い論理を創り上げていくということは、子どもの集団思考を成立させる上で実に大事である。

子どもが集団として組織されないと自分の意見さえ言えればいいのだというような空気になる。そうするとたんに教室の学習活動が停滞し、集団で学習することの良さが生かせなくなり、子ども自身が集団の中で切磋琢磨しあう関係を築けなくなってしまう。

子どもの学習活動が個別化し、集団思考が未成立であれば、子どもは自分勝手になる。そのような場合に級友の意見に耳を傾けなくなってしまうような児童にしてしまうことになると考えられる。

この後行なわれた校長室での話し合いの際には、担任の教師はすっきりした表情で自分が事前に作っていた指導計画が欲張りなものであったということを素直に認め、そして、公開当日に行なう授業の構想をもう一度考え直してみると自分から話した。そして教科書会社が作成した教師用書には異種である二つのものの対応が単なる傍線(一)で表現されていたのに対して、西小の1年生の児童たちは〈チョウチョウ→チューリップ(チョウチョウがチューリップにまんべんなく留まる)〉とか、〈チューリップ→チョウチョウ(チョウチョウにチューリップを平等にあげる)〉というように、教科書よりはるかに具体的に論理的な説明をしていることを川嶋から指摘され、すっかり自分の学級の児童の素晴らしさに驚いてしまっていたようであった。

このように自分のやり方を途中から変更できたり、先輩の言葉に素直に耳を傾けられる柔軟さというものは、教師にとっての大事な資質のひとつである。もちろん、最初から自分のやり方を構想もせず何でもかんでも人のやり方を真似るといような迎合的な態度では、教師としての成長はある程度でストップしてしまう。この学級の教師のように自分の考えを出してみたり、実際に自分の考えで授業を試みるということによって、自分にとって最も大切な教師としての課題が見えて

くる。

5) 学校公開の意味と地域への波及効果

今回の学校公開研究会は、児童の姿を見せるという意味において、実質的で、意味のある「学校公開研究会」になった。

最近では、学校教育をめぐることは、その実効性をめぐってさまざまな議論がある。教員評価や学校評価の他、教員の資質向上のための研修の充実、教員免許更新制など課題が山積しているというところである。そうした状況の中で学校が児童たちの姿を公開し、教職員が裸になって授業や表現活動の充実に打ち込むということは本当に大切なことである。

そして何よりその中で児童たちが本当に真面目に努力し、自己を高め、仲間とともに成長していくとする姿に、学校をとりまく地域の人々や保護者、参観した関係者たちが心の底から感動したという事実が大事である。その意味では、今回の西幼稚園、西小学校公開研究会において、まずは授業の充実を目指してすべての学級で教科目ごとの授業を公開したことは大きな意味を持つ。

学校公開研究会を終えたあと、夕方から体育館で開催された交流会では、参観者たちによる短いコメントがあり、食事を取りながら楽しい時間を過ごした。保護者や教職員の方たちが用意してくれた手作りの料理をいただきながら、今日一日に起こった出来事を想起してみるのには、本当に心地がよい。

2000（平成12）年の春に梶山正人と同行してこの学校を訪ね、参観した学芸会の時のことを思い出しながら、当時のPTAの方たちの見事な機動力と、とっさの対応力の素晴らしさのことに思いを馳せていた。梶山による前日の手入れのあと、深夜零時を過ぎた頃になって、PTAの役員の方たちが体育館に敷き詰めたゴザを新しいものに替えようと言いつし、その作業をすぐさま始めたことがあった。筆者は、一緒に農協の倉庫にあった新しいゴザを運び、体育館に敷き詰める作業を手伝ったが、この時の保護者の方たちの表情は、西幼稚園や西小の子どもたちと同様にすっきりしたものであった。そして、子どもが高まっていくと

いうことは、子どもたちの中だけに生じることでなく、保護者や地域の人々など、さまざまに関連する人々に対してよい影響を及ぼしていくものなのだというをはっきりと認識したのである。子どもや教師が毎日努力しているのに、じっとしてはられない、他にまだ出来ることがあるのではないかと真剣に語り合うPTAの役員の方たちの様子を見ながら、学芸会当日を迎えたことが昨日のこのように思い出される。

西幼稚園と西小の学校づくりを通して分かってきたことは、学校で子どもが自信を持ち、自己を表現できるように成長していくことによって、その効果が徐々に周辺に及んでいくという事実である。先述の通り西小の場合には、同村内に伊江小学校と伊江中学校があり、それぞれ教職員の異動や児童の進学などで密接な関わり合いがある。そして、それぞれの学校において校内研修が充実し、生徒が一所懸命に努力するようになっていった。

先述のように、昨年（2005年）秋に梶山と同行して、伊江島を訪ねたときには中学校の2年生たちが校内合唱コンクールで学校代表となり、地域を代表して国頭（沖縄本島の北部）地域での音楽会に参加するというので、来島中の梶山にぜひ歌の指導を受けたいと生徒たちが集まってきたことがあった。あいにく西幼稚園・西小では、体育館の新造工事中で子どもたちは町役場の2階にある公民館の講堂を使って表現活動の練習をしていた。その合間を縫ってお昼休みに急遽中学生たちの歌声を聞くことになった。後で伺ったことであるが、この2年生は、昨年度1年生の時にも伊江中学校の学校代表となった。生徒の大半が西小で6年間にわたる表現活動の追求を経験した子たちである。また、伊江小学校から進学してきた生徒たちの多くが、西小から異動した教職員に受け持たれていた。

中学生の歌声は、実に素晴らしかった。中学生らしいはつらつとした歌声に、梶山と共にその場に立ち会った小学校の先生方は、歌声に聞き惚れてしまいビデオでの撮影を忘れてしまうほど真剣に生徒たちを見守っていた。

同年には、川嶋環が同じく伊江中学校の教室で

詩の授業(「春」)を行ない、また、同校の教師が介入授業(「座蒲団」)を行なった。この時には、生徒たちの屈託のない開放された姿に驚かされた。伊江中の校長は、非行とか、不登校とか、そういう問題は全くないと胸をはって話していた。更には徐々に生徒の学力が向上してきているという。

授業や学校行事を通して、充実した学習を経験

した子どもたちが、さまざまな場面で活躍しているということを開き、学校教育の可能性というものがまだまだあるのだと思った。

こうした学校づくりの事実を通して、学校の素晴らしさ、子どもたちの可能性の素晴らしさというものをさまざまな人たちに向かって発信し、素晴らしい先生方と一緒に未来の創造という課題に挑戦していきたいものである。

註

- * 1 2006(平成18)年7月11日中央教育審議会「今後の教員養成・免許制度の在り方について」答申
- * 2 教職課程の改善・充実に関する協力者会議(文部科学省初等中等教育局)委員に2006(平成18)年2月から参加している
- * 3 平成14年中央教育審議会答申「今後の教員免許制度の在り方について」
- * 4 2006(平成18)年8月より教員免許更新制の導入に関する検討会議(文部科学省初等中等教育局)委員、同打ち合わせ委員会として参画している
- * 5 中央教育審議会「今後の教員養成・免許制度の在り方について」答申。同前によれば、教員免許更新制の実施者は、免許管理を行なっている都道府県教育委員会としており、講習は、課程認定大学の他、大学との連携協力により都道府県教育委員会や中核市教育委員会が開設することが出来るということになっている。しかしながら、都道府県の反応は事務量の増大などを想定して受動的であり、実際に開設を申請する自治体が出てくるかどうかは、課程認定大学による積極的な連携方策の有無にかかっているといつてよい
- * 6 狩野、「生活」と学習の結合に関する教育実践の研究—野村芳兵衛を中心に—、宮城教育大学大学院学校教育講座編『教育論集』第4号、1993(平成5)年3月。同、教育実践における生活学習の展開—野村芳兵衛の実践(1936—)を通して—、1997(平成9)年、『沖繩国際大学短期大学部論集』1997年。同、池袋児童の村小学校における「生活」カリキュラムの創造、『教育目標・評価学会紀要』第9巻、1999(平成11)年など
- * 7 横須賀薫編『授業研究用語辞典』教育出版、1990年。狩野、島小の教育実践—授業づくり、『鹿児島大学教育実践研究紀要』第12巻、39-59頁、2002(平成14)年11月など
- * 8 狩野、「沖繩第三土曜の会」の教師と教育実践、『鹿児島子ども研究センター研究報告』No.10、67-79頁、2001年3月
- * 9 2005(平成17)年6月2日に伊江中において行なわれた校内特別研修会に参加し、中学2年生、3年生の授業を参観した
- * 10 筆者の聞き取りによる
- * 11 2005年6月2日、同前
- * 12 狩野、「沖繩第三土曜の会」の教師と教育実践、前出
- * 13 2006(平成18)年1月30日から2月4日
- * 14 狩野、伊江村立西小学校の教育実践、『鹿児島大学教育学部研究紀要(教育科学編)』第52巻、193-210頁、2001年3月
- * 15 2000年2月3日~6日
- * 16 狩野、伊江村立西小学校の教育実践、同前
- * 17 狩野、沖繩における現職教育の充実に関する教育実践、『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』第15巻、139-148頁、2005年11月
- * 18 1987(昭和62)年4月から4年間、宮城県亶理郡亶理町立荒浜中学校に勤務した
- * 19 教授学研究の会の中心的な役割を担ってきた横須賀薫によれば、1974(昭和49)年12月に行なわれた教授学研究の会冬の合宿研究会(湯河原)において斎藤喜博から「研究者に授業実践に入り込むように強く要請、研究者間に微妙な分解が始まる」とある。横須賀『山に在りて 学長六年の記』本の森、2006年、388頁
- * 20 2002(平成14)年8月、岩手県一関市で第一回研究会が開催された。教授学研究の会顧問の横須賀薫、世話人の箱石泰和、小林重章、松本陽一のほか、斎藤喜博や島小の研究を展開している研究者が年2回のペースで集まり

研究会を開いている

- *21 狩野、小学校説明的文章の授業―「動物の体」―、『臨床教育研究』宮城教育大学、1993年3月、77-96頁、同、教材発掘による授業づくり―"ヒトとは何か"の授業―、『臨床教育研究』同前、1994年3月、38-56頁など
- *22 狩野、島小の教育実践―横口（介入）授業の展開とその意味―、『鹿児島大学教育学部研究紀要（教育科学編）』第57巻、133-149頁、2006年
- *23 以下の文章は、西幼稚園・西小学校（沖縄）の学校公開に学ぶ、『事実と創造』No.301、一莖書房、P11-21、2006（平成18）年6月を大幅に加筆修正して再構成したものである
- *24 梶山正人オベレッタ曲集『かたくりの花』一莖書房、1992年所収
- *25 西岡は、前校長の時代から描画や版画などの表現活動の指導に西小を訪ねている。西岡については、西岡陽子『心をひらく美術教育』一莖書房、1989年、佐伯胖、藤田英典、佐藤学編『学びと文化5 表現者として育つ』東京大学出版会、1995年、横須賀薫他編『心をひらく表現活動（3）表現の追求』教育出版、1998年等が詳しい
- *26 梶山正人オベレッタ曲集『かたくりの花』同前所収
- *27 事につくる展開の契機。横須賀薫編『授業研究用語辞典』教育出版、1990年
- *28 一般的傾向として、算数の授業において図を使って説明することとブロックを使って説明することなどを子どもの個性ととらえる向きがあり、この授業においても教師はそのように把握し、学級の児童の中からこのように取り上げたのであった。しかしながら、児童の考え方、思考内容としてみれば、必ずしも異なっているとは思えないものもあり、この場合もブロックで表わした児童のものは、図で表わしたものとほぼ同じであった。安易に思考の表現方法をもって、子どもの個性の発露であると把握するのは無理があると感じた

【附記】

本研究においては、長崎大学、鹿児島大学、琉球大学の三大学による「新しい時代の要請に応える離島教育の革新（三大学連携事業）」（平成17～18年度）の助成を受けた。

沖縄県国頭郡伊江村立西幼稚園、西小学校における校内特別研修会の他、学校公開研究会等においては、同校校長の上間順一氏の他同校の教職員、保護者、伊江村教育委員会の皆さんからお世話になった。特に、元同校校長であり、沖縄第三土曜の会の中心として活躍している西江重勝氏（元沖縄県教育庁那覇教育事務所長、元那覇市立城北小学校校長）には、筆者のすすめる授業研究に関して助言いただくなど物心ともにお世話になった。

川嶋環氏には、学校公開研究会に向けての指導の在り方や授業の見方などについて、実際の場面の中でご教示いただき、授業中や表現活動の合間に子どもの表情や動作の美醜などについて具体的に指摘していただいた。

ここに記して感謝申し上げます。

本稿を書いている途中で、梶山正人氏（千葉経済短期大学名誉教授）の訃報に接することとなった。梶山氏は、筆者が西幼稚園、西小学校を初めて訪問した7年前に同校の特別研修会で一緒に以来、沖縄の学校や斎藤喜博研究会などでしばしば一緒に過ごす機会を得てきていた。梶山氏は、子どものためのオベレッタの作曲において大変素晴らしい業績を残されただけでなく、実際に子どもたちに対して歌唱や身体表現などの指導をしてこられ、子どもたちの生き生きとした表現の事実をいくつも創造してこられた方である。また、かつては宮城教育大学附属小学校などで音楽専科教員として活躍され、また、近年は千葉経済短期大学において教師教育の仕事がすすめられる中で斎藤喜博による音楽指導研究を続けて来られた。本年9月の第7回斎藤喜博研究会（鎌倉）では、その研究の報告が予定されていた。

梶山氏から得た学恩は、ことばでは言い尽くせるものではないし、斎藤喜博研究の展開の他、オベレッタや歌唱などの指導場面を実際に見られなくなってしまったことが本当に残念である。